

言葉の意味を変えてしまった戦争

かくたに みく
角谷 美玖

「戦わなければ殺されたんだ。」戦争の話をしたがらなかった曾祖父が、母にたった一度だけ苦しそうに言った言葉。開けてはいけない記憶の扉を開けてしまった罪悪感を母は今でも思い出すと言った。戦争が終わり、何十年も経っているのに、乗り越えることができないほどの苦しみを、曾祖父は独りずつと抱えて生きてきたのだと思うと心が痛くなった。

曾祖父は、うなぎや太刀魚が大嫌いだった。戦時中に使った武器を連想させ、その当時の記憶が蘇るからだそうだ。その話を聞いて、ふと先日テレビでウクライナの今を取材した報道番組を思い出した。テーマは「言葉」だ。長引くロシアとの戦争が、ウクライナの人々の言葉の意味を変えていつているという内容だった。

例えば、ある人はお風呂が以前はリラックスできる場所だったのに、今は爆撃から身を守るための場所となり、ある人は、かつて恋人と聞いていた庭先に落ちるりんごの音が、ミサイルの音を連想させるようになったそうだ。大切な思い出や自分の中のイメージが、戦争と結びつき、その言葉の意味を、記憶を変

化させてしまっていたのだ。どこか他人事のように思ってしまった遠い国で起こっている戦争の体験が、かつて日本の苦しい経験と重なった。現実にもなお行われている人と人の殺し合いが、心に消えることない傷を残して繰り返されているだと思ふと心が痛くなった。

曾祖父のように心の傷に生涯悩まされる人を一人でも減らすために、戦争を知らない私たち世代に何ができるのか。「人同士が争い、多くの人が傷つき嘆く中で、一人幸福を見出すことは難しい。しかし、争いを鎮めようと人が話し合うなか、一人傷つき不幸なままにいることの方がより難しい。」これは母があるご住職から聞いた言葉だが、この言葉の中に答えがあるのかもしれない。身近な人と争うのではなく、身近な人こそ大切に生きていくこと、お互いを尊重し合いながら生きていくこと。私にできることはこれぐらいのことしかないけれど、少しの思いやりが周りを幸せにしていく。一人ひとりの小さな一歩が、人から人へのやさしさがやがて大きな輪になって伝わり、平和へとつながっていくと私は信じている。